

2026年7月12日 説教「十字架と復活の預言」

ルカの福音書 18 章 31～34 節

先週は世界宣教週間でしたので、使徒の働き 16 章から学びました。そして、先々週はルカの福音書の前段から「金持ちの役人」がイエスに従えなかった記事を読みしました。

1. 十二弟子達への語りかけ (31 節)

①十二弟子達を呼び (31) 「さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された。」

12 弟子だけに話されるという場面が時折ありますが、重要なことが語られることが多いです。それこそ、イエスが弟子育成に特別の思いを持っていたからでもありましょう。もっとも、いくら愛を注いで教えられたからといって、誰もが順調に育ったわけではありません。なにしろ、この 12 弟子の中にはイスカリオテのユダも含まれていたのですから。

②エルサレムに (31) 「『さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かっていきます。』」

イエスは、弟子達にエルサレムへの道に向かうことを宣言されました。ガリラヤ伝道を経て、エルサレムへの道をたどってきた彼らですが、目的地は近づいてきました。19 章 28 節以下には、エルサレム入場の記事が記されていますが、イエスにとってもそれは特別なことでありました。これまでもエルサレム滞在と働きがあったわけですが、今回のエルサレム行きはイエスの生涯の究極的目的のためでありました。

③預言書の実現 (31) 「『人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。』」

イエスは今回エルサレムに入られることは、長い神様のご計画のなかにあった出来事であることを明らかにされます。つまり、それは人の子イエスについて預言者たちが記してきた預言の実現の時であることを告げられたのです。例えばイザヤ書にはメシヤの誕生預言にはじまり(7～9 章等)、メシヤの受難預言がありました。それらのことの意味は、ある面では不明なこともあったのですが、それらが実現するとイエスは明言されているのです。

2. 十字架と復活の預言 (32～33 節)

①異邦人に引き渡され (32) 「『人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。』」

ここに、イエス「異邦人に引き渡された」という受難の預言がありますが、総督ピラトの下に裁きがくだされることを意味します。さて、イザヤ書 53 章にはメシヤ(救い主)の受難預言が記されています。3 節には「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。」とあります。そうしたことは確実に実現し、人の子イエスは、いばらの冠をかぶらされ、からかわれ、「つばきをかけられ、葦の棒でイエスの頭をたたいた」(マタイ 27:30)ということが実現することになるのです。

②人の子の受難 (33) 『**彼らは人の子をむちで打ってから殺します。』**

イエスの預言の言葉はここに、「彼らは人の子をむちでうつ」とあります。実際のところ、「イエスの監視人どもは、イエスをからかい、むちでたたいた」(ルカ 22:63)とあるように実現したのです。その上で「殺す」とありますが、これがイエスの十字架上で死の出来事であることは言うまでもありません。イエスは逮捕された後に、形ばかりの審問を受け、結果的にはピラトの宣言により十字架刑を受けました。その主は苦しみの中でも「父よ。彼らをお赦しください。彼らは何をしているか自分でわからないでいるのです」(ルカ 23:34)と言われたことは私達が知る通りです。

③三日目によみがえり (33) 『**しかし、人の子は三日目によみがえります。』**

イエスの預言は人の子は殺されることになるが、死んだ後の三日後によみがえるというものでした。死ぬだけであるのなら、ある面では絶望ですが、よみがえるということを伝えられているのは、救い主が確かに私たち人間を救い、いのちの希望を与えてくださっていることをそこに見るのです。

3. お言葉を理解できなかった弟子達 (34 節)

①何一つわからず (34) 『**しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。』**

こうしたイエスのお言葉を受けて、弟子たちはどのような反応をしたでしょうか。ここに、彼らは「これらのことが何一つわからなかった」とあります。これまでも伝えられて来たことです。しかし、彼らはそれを正面からは受けとらず、いわば聞き流していたのです。ところが、ここでは「わからなかった」とあり、彼らには主イエスが来られた根本的な理由というものが、本音ではわからなかったのです。

②ことばは隠され (34) 『**彼らには、このことばは隠されていて、**

ここにはそのことを、「彼らには、このことばは隠されていた」とあります。イエスの言われた「ことば」は、「奥義」(ミステリオン)であったのです。出来事の根本的な事実と意味は、十字架と復活の出来事が生じる前には、彼らには見えてこなかったのです。隠されているというのは、神がいじわるに隠しているわけではなく、人間という存在が自らの罪のゆえに、救いについても十字架といった残酷な出来事を経るなどという事は思いつきもしなければ、考えたくもなかったのです。

③理解できず (34) 『**話された事が理解できなかった。』**

そこで、弟子達はイエスの話されたことについては、理解できなかったのです。それは、頭で理解しようとしていたからです。もともと、主の福音は常識を越えたニュースです。それを常識的考えで受け取ろうとすれば、理解することができないのは当たり前のことでした。なにしろ、弟子達は誰が自分たちのなかで偉いかを考え、話し合っていたのですから、十字架と復活については、彼らの考えを越えていました。

《結論》イエス・キリストはこれまでも二回、御自身の受難の預言をしてされました。9:22 には「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらなければならない」とあり、9:44 には「人の子は、いまに人々の手に渡されます」とあります。

ところで、自分の将来について預言出来る人はいるでしょうか。中には、「将来はこのようなことをしたい」といったような大志を持ち、それを伝える人はいるでしょう。しかし、人は自分の将来のこともわかりません。まして、自分が将来十字架で処刑されるということを預言する人はいません。イエスは完全な神ですが、完全な人間として生きて下さった方です。であれば、人間イエスとしては、御自身が十字架刑に服すると知っていた上で、それをお伝えになることはとてもお辛かったと思われます。主は十字架にかかる前に、ゲッセマネの園で、「もしできることならこの時が自分から過ぎ去るように」と祈られ、「この杯(十字架)をわたしから取りのけてください」(マルコ 14:38)と祈られました。神である方は、人間としての苦しみは我々と同じなのです。その方はそれを踏まえた上で、受難と復活を預言しておられるのです。

主イエスはなぜこのような受難預言をされたのでしょうか。その理由の一つは、預言書において言われていた神のご計画が、今や実現するという重大な時だったからです。第二は、恵み深い神のご計画により、人間に救いが与えられようとしている事を示すためでした。そして第三には、この奥義が語られることにより、十字架と復活の後に、人々がこの奥義を理解できるようになるためでした。つまり、この時点では弟子達にも隠されていた奥義が、啓示されて、人々に福音として伝えられていくためでした。

この奥義の内容を、私たちは聖書を通して、教えられています。イエス・キリストは、御自分のいのちを十字架上でおさげになり、死んでくださったことにより、私たちは贖い出されました。「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」(ローマ 3:24)とある通りです。この福音を私たちは、いつも聞いている福音ですが、キリストが十字架にかかる前に、イエスが語られても弟子達すら理解できなかったのです。

ということは、私たちは当たり前のように、知っているこの奥義である福音をもっともっと伝える必要があります。当たり前のように思っていることは、周りの人々には当たり前ではありません。親しい人から始めて、知り合いになった人、誰にでも、伝える必要があります。これは奥義です。知っていることは当たり前ではありません。私自身、イエス様を単純に信じている高校生の頃でも、救いは良いことをたくさんすることでもたらされるものだと思いこんでいました。ところが、実際は良い事よりも悪い事(罪)を重ねることの方が多かったのもので、救いはありませんでした。大学生になって、伝道団体の人から福音を熱心に伝えられた時にもまだわかりませんでした。後に自分の現実的な罪を神の前に告白して赦しを確信した時に、福音の恵みがわかりました。自分で良くなるのではなく、恵みによって赦され、救いをいただいて、少しずつきよめられていくのが順序です。福音を伝えていきましょう。それは奥義を知る道でもあります。